



目次:

お国自慢(台湾編～その巻)	2
今月のお誕生日会	2
好評連載 広岡先生の随筆④9 翳りゆく大学	3-4
はくび会ソフトボール大会1・2回戦	5
ヤギ講義	5
お知らせ	6

はくび会(畑)!

応用動物系5研究室にて構成される同窓会組織「はくび会」の管理する畑で、畝作りおよび苗植えを行いました！昨年からは畑自体は復活してはいたのですが、本格的に作業に参加するのは初めてです。私はほとんど作業というよりははくび会の人たちとしゃべることを目的に参加したのですが、意外と本格的で楽しかったです。特に畝作り！耕うん機を使って行ったのですが、扱いがかなり難しく己のテストステロンの低さを思い知らされました。



ローTです。ハイTになれるように頑張ります。朝のクールドシャワーから始めようと思います。いろいろと書きましたが、初めての機械にも触れましたし、友達もできたので私にとっては非常に実りのある時間でした。苗植えが終わってしまったのでしばらく畑作業はないですが、作業があった際には必ず参加しようと思います。

P.S. 万願寺とうがらしを植えてほしかったのですが今年は無くて残念です。代わりにトマトを爆食します。(はげうで金色狼)



アメリカのオレオが届きました。薄いオレオ(Thin)にレモンサンドってもはやオレオじゃないんじゃない？

お国自慢（台湾編～その巻）

みなさんこんにちは、蔡です。私の出身は台湾の台北市松山区ため、今回は台北の名物を紹介するつもりです。

まず、台湾の夜市について紹介したいと思います。夜市は主に中華文化を中心に存在し、夕方から真夜まで営業する屋台や店などを集めている場所である。夜市は食べ歩きだけではなく、服や靴などの日常品もあり、射的や子供向けのパチンコなどのゲームでも遊べる。



蚵仔煎

夜市において、「胡椒餅」「炸雞排」(台湾唐揚げ)

「粉圓冰」(タピオカかき氷)「木瓜牛奶」(パパイアミルク)などいろいろなグルメがありますが、私にとって、「蚵仔煎」という牡蠣とたまごの焼き物は一番おすすめだ。なぜなら、「蚵仔煎」の中身はさつまいもデンプンやタレを生地として焼き、そして牡蠣、白菜やたまごを加えることだ。一口食べて、ぷりぷりの牡蠣、もちもちの生地、とろりとしたタレを同時に食べられる。もし台湾に行ったら、ぜひ「蚵仔煎」をたべてみてください。



次は「台北燈節」という祭りみたいなイベントについて紹介する。そのイベントは毎年新年の頃、台北市の北門駅エリアで開催されている。燈節のテーマは十二支の順番によって、毎年違い動物のランタンを見られる。例えば、今年は辰年ですから、燈節に一番大きなランタンは竜の様子である。日台友好のため、常に日本からのランタンを見られる。

つづく



今月のお誕生日会



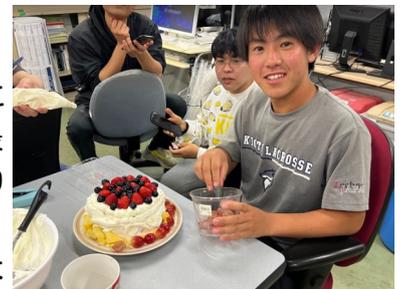
久しぶりに畜資でお誕生日会を開催しました♪

今月のお誕生日さんは4回生のパズー田中くん、ケーキのリクエストは「フルーツ系」ということで、頑張って自分で飾り付けをしてもらうことにしました。初めてのケーキデコレーションに最初は戸惑い気味でしたが、クリームを塗ってイチゴ、ブルーベリー、パイナップル、ブドウを飾り付けるまでには、満面の笑みがみられました。思い通りにフルーツがたくさん載ったケーキは、ろうそくを立てる場所にも困るほど。ろうそくに火が点いたら、あっという間に口が解けて大変な事態に…



さて、完成したケーキを13等分(!)に…これは諦めて、8等分に切ったケーキを2人一組で分けて食べてもらうことになりました。切られたケーキは原形をとどめず…ま、味は変わらないのでよしとしましょう。

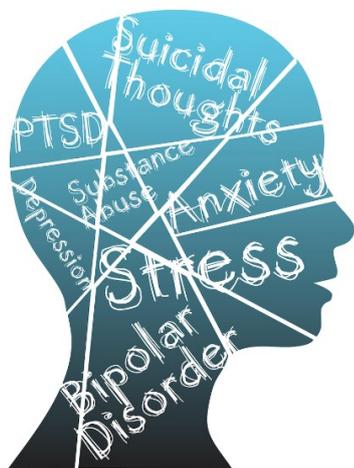
みんなで楽しくおいしくいただいて、最後は記念撮影となりました。(よ)



好評連載 広岡先生の随筆

④9 翳りゆく大学

研究力の低下はなぜ起こったのか



23年間にわたり京都大学の在籍し、自分の出身研究室の教授として多くの学生とともに研究し、また教育指導してきたが、この間に年々大学が変容してきたのを実感している。もちろん、この間、本当に楽しく、多くの関係者、学生たちには心から感謝しているが、大学の行く末に対しては少し不安に感じている。母校である京都大学はもちろんのこと、日本の大学全体のために何かの示唆ができればと筆をとることにした。

私の見立てとしては、バブルの崩壊以降、日本の国力の低下に比例して、大学の研究力も確実に低下していると思っている。そもそもなぜ日本の大学の研究力は落ち続け、歯止めのかからない状況になってしまったのか。1980年代に学生として研究に関わり始め、現在に至っている生き証人としての私としては、研究力の低下は2004年に始まった大学の法人化と2005年以降の運営交付金(基盤となる研究費)の削減が、最も大きな影響を及ぼしたと考えている。特に、京都大学にいてその影響を強く感じるようになったのは、法人化してしばらくたった2010年以降であろう。

ノーベル賞受賞者をはじめ、ほとんどの研究者が大学における研究力の低下の元凶として指摘し続けているのは、大学における研究の基盤となる研究費(運営交付金)の削減である。実は私が所属していた京都大学はまだ恵まれていたようで、地方の大学では一人の研究者に配布される運営交付金は10万円を切るケースもあるとよく耳にする。特に多くの理系研究者にとっては実験ができなければ何もできず、実験には設備や機器などの備品や薬品などの消耗品その他多くの研究コストがかかる。これらの経費はいくら節約を心がけても限界がある。それに加えて、研究成果の学会での発表や調査などの旅費が必要で、さらに研究成果を専門雑誌に投稿しようとしても多くの場合掲載費が費用で、誰でも読めるオープンジャーナルに掲載しようすれば、1論文当たり少なくとも50~60万円は必要となる。せっかく素晴らしい研究成果を得て論文としてまとめ、世界に発信して、大学の研究力、ひいては日本の研究力を高めようとしても、論文として学術雑誌に掲載できなければ、多くの実験コストと膨大な労力をかけて成功した成果でも、大学のためにも日本のためにも全く寄与しないことになる。

逆にそれではなぜ、20世紀に日本の研究は世界のトップクラスでありえたのであろうか。日本は1950年から1960年代にかけての高度経済成長を経て、1990年代初めのバブルの崩壊までは米国を凌ぐ世界一の豊かな国に手が届きそうになっていた。私が1980年代の半ばにマレーシアで研究をしていた時などは、マレーシアでの物価の実感 は日本の1/10(もっと差があったと思うが、学生だったのでこれぐらいに感じた)で、学生でありながらかなりリッチな生活ができた。また、1995年から1996年にかけてオランダに留学して家族と生活していた時でも、物価の実感 は日本の2/3程度であった。このような豊かさや国力を背景に日本の研究力は世界のトップクラスを維持できたのだと思う。さらに言えば、日本の研究者は基本的に勤勉で、まじめに一所懸命に研究をしてきたこともよかったのではないかと思う。



私はこれまで研究ツールとしてコンピュータを使ってきたが、そもそも1980年代の初めになぜコンピュータを用いる研究をテーマとして選んだかと言えば、農学部のすぐ近くにあった大型計算機センターで、日本有数の高性能な大型計算機を使えたからである、また、SASをはじめ最先端の統計パッケージや最新のFORTRAN、C言語、PLIなどのプログラム言語を使うこともできた。この時代にはまだ世間にはパーソナルコンピュータは普及しておらず、私はすばらしい研究環境に恵まれた。このことは、先述のマレーシアでの研究において



も痛感したことで、マレーシアにも大型計算機はあったが、性能がかなり劣り、現地での研究の遂行には苦勞した。さすがに1990年代半ばのオランダでは、高性能なワークステーションが利用できたので多くの研究成果を得ることができたが、それでも日本ではこの時期には私立大学に所属していたため、京都大学との大型計算機の性能の違いを思い知らされることしばしばであった。実は、日本の国力や失われた30年の影響、さらには研究費の削減のため、現在の日本の研究環境はかなり劣悪で、周りでも本当に優秀な若手研究者は国外に職を求めて日本から出て行っている。

このような話をすると、それなら国からの運営費に頼らず外部資金を獲得すればよいではないかという意見も耳にする。しかし、私自身もこれまで科学研究費や外部資金も数多く獲得してきたが、特に企業などからの外部資金の獲得には大きな落とし穴のリスクを抱えることになる。というのは、外部資金を出してもらおうということは、出してくれた誰か(あるいは企業など)の意向を慮ることにもなり、下手をすれば自由で公正な研究ができなくなることもありえることである。さらに本来絶対にあってはいけないことであるが、研究不正に手を染めることにもなりかねない。大学行政に携わる方々の中で欧米の国々(特に米国)の大学を模範にすべきと考える方も多いようであるが、よく考えておくべき事は、欧米の国々ではキリスト教の教えに基づく寄付文化があり、それと比べて残念ながら日本人は寄付意識が低く、現状では、大学が一般の方々から寄付を集めることは欧米と比べてかなり難しいと言える。

また近年、国と研究者の関係においても、忌々しきことが起こっている。最近、政治家をはじめ大学行政に関わっている人々が理系研究者を手なずける手段として研究費が使えることに気づいたようで、多額の研究費を重点的に配分する制度を作って、「毒饅頭」となる多額の研究プロジェクトの応募を乱発し、多くの研究者が、国の主導する研究費の獲得のための申請書づくりに精を出しすぎて、本来すべき研究や本当に実施したい研究ができなくなり、その結果、日本の研究力の総和はますます低下することになってしまっている。私の経験上、実際に実施した研究のうち、成功する研究はせいぜい30%足らずで、大半は徒勞に終わることなる。研究とはそういうもので、ましてやお金を獲得する目的で書いた申請書の内容がうまくゆくことはまれであろう。最近は何とか多額の研究費を獲得しようとできそうにないことを申請書に書き、ホラを吹き続けている研究者もよく見かける。



いま、日本の研究者に真に求められていることは、研究に対する崇高な理念と真摯な態度、未知の現象に対する真理の探究、そして何よりも研究に対する誠実さと謙虚さであろう。

はくび会ソフトボール大会1・2回戦

ソフトボールの季節がやってまいりました！今年もトーナメント方式のダブルエリミネーション(2回負けたら終わり)での試合進行で行われました。まずは5月16日に畜種との1回戦がありました。

試合前にみんなで練習したこともありノリノリで迎えた試合でした。畜種はほとんど女子チームとなっており、大石先生、ようこさん擁する畜資でも0-3のハンデからスタートとなりました。しかしながら、今年の4回生3人が野球あるいはソフトボールの経験者ということで、彼らの活躍もあり9-4で勝利することができま



まずは中庭で事前練習

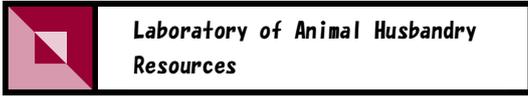


(左)小川先生率いる動物遺伝育種チーム(下)畜資の最強打撃陣(ここに写っていないゲントが実は最強打者でした)

した。続いて5月27日に栄養との2回戦がある予定でしたが、急遽栄養側の都合により、畜資の不戦勝という形になりました。次は生殖との試合が待っています。曇りや雨になることも増えてきた今日この頃ですが、いい天気試合を迎えたいです。頑張って優勝つかみ取りましょう！ぜひ応援よろしくお願いします！（しげ）



【ヤギ講義】今年度から2回生を主に対象とした「資源動物生産学」を大石先生と塚原先生が担当しています。塚原先生は、ヤギの話しかしないので、「応用動物科学」のルレ講義を含めると5コマもヤギ話に付き合うことに・・・ヤギについて、そんなに話することができるのかと思うんですが、「世界の生産システム（ヤギ編）」「日本の生産システム（ヤギ編）」「資源動物の生産評価（ヤギ編）」「世界の人々を救う畜産動物ヤギを科学する」「動物管理とアニマルフェア（ヤギ編）」意外に話が止まりません。受講している学生さん、もう少しの辛抱です。いや、逆にヤギ好きになってしまうかもしれませんね。



Faculty of Agriculture,
Kyoto University,
Kitashirakawa-Oiwakecho,
Sakyo-ku, Kyoto 606-8502, Japan
TEL: 075(753)6365
FAX: 075(753)6365
<https://www.animprod.kais.kyoto-u.ac.jp/>

GOAT BULLETIN



GOAT BULLETINは、皆様の投稿記事で成り立っています。形式・文字数は問いません。また、読者の方々からのご意見やお問い合わせも大歓迎です。下記のアドレスまでどしどし送信してください。
tsukahara.yoko.8v@kyoto-u.ac.jp

お知らせ

今月のゼミ

6月4日 研究進捗報告会(修士全員)、6月11日 岩井、菊池、田中(文献紹介)、6月18日 創立記念日のためお休み、6月25日 学生実験のためお休み

だんだん暑くなってきたので、羊の毛刈りをしました。重いウールを脱いで、仏児たちも春の装いになりました。



編集後記

暑いですね。6月に入ってから30℃を超える日が何日もあります。満開のアジサイも雨が降らないので立ち枯れしています。豪雨も困りますが…

June 2024

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
						1 田中
2 しげ	3	4 畜資ゼミ	5	6	7 四回生演習	8 入船
9 山田	10	11 畜資ゼミ	12 ヒツジ導入 ソフトボール対生殖	13	14 四回生演習	15 澤田
16 岩井・げんと	17	18 畜資ゼミ	19 ヤギ導入	20 ソフトボール対生体	21 四回生演習	22 入船
23 江川	24	25 学生実験	26 学生実験	27 学生実験	28 四回生演習	29 岩井・げんと
30 蔡						